

一、盛名終りを令くするは少なし——勝間の志——

西郷は辞世の詩を遺さなかった。だいたい西南戦争が勃発してから、詩作そのものをピタリとやめている。政府軍の参軍山県有朋は、岩崎谷の洞窟にこもる西郷軍に総攻撃の日時を伝えているので、訣別の宴を開いたといわれているその前夜にでも、辞世の詩を詠もうと思えば詠めたはずだ。

実は、「西郷の辞世の詩発見か」という新聞記事が、二〇〇九年九月十二日の各紙にいつせいで出たことがある。その漢詩は、西南戦争で政府軍の医師であった山崎泰輔（一八四〇—一八九八）の日記に書き残されていたもので、次のような詩である。

肥水豊山路已窮
肥水豊山路已に窮まる
墓田帰去霸凶空
墓田に帰去せん霸凶空し
半生功罪兩般跡
半生の功罪兩般の跡
地底何顔対照公
地底何の顔ありてか照公に対せん

肥後の川を渡り、豊後の山を越えて来たけれども、征路はもはやここに窮まった
先祖の眠る墓地に帰ろう、新政府を制覇する計画が破綻したからには
私の半生は、功績と罪過の両方の跡かたを残したようだ

冥途に行ったら、どんな顔をして斉彬公にお目見えしようか

○肥水：肥後（熊本）の川。 ○豊山：豊後（大分県）の山。 ○墓田：先祖代々の墓地。 ○覇
凶：明治新政府を制覇する計画。 ○兩般：両
様。 ○照公：照国（斉彬）公。

西郷実作の可能性が高いということから新聞記事に出たのだろうが、その真偽については、いまだに賛否が分かれている。

ただ、私なりの感想を言えば、西郷の実作の可



西郷軍がこもった洞窟（鹿児島市城山町）

能性は低いのではないかと考えている。その理由として、他人の日記に記録されていること、推敲前の原作までその日記にあることなどが挙げられる。また、詩の内容という点でいうと、西郷自身の半生が他人事みたいに総括され、あまりにも冷めた客観的な感じを受けること、今度の決起を自ら「霸道(覇道)に基づく戦略」と位置づけており、西郷が本来尊重しているはずの「王道」と合わないこと、詩の中でこれまで一度も触れたことのない照公(斉彬公)を持ち出していることなどが、西郷の実作を疑わせる根拠である。

これまで西郷の詩を見てきて感じたことだが、西郷は、自分の心の奥深くに刻んでいる思いは、決して人に漏らさないタイプの人間ではないかという印象を受ける。だから、「照公」への思いを詩のテーマにして詠んだものは一つもないのである。

第一章の三で見たように、月照と入水自殺を図った時は、辞世の和歌を詠んでいるが、そのときは武運つたなく生き返ってしまった。それに懲りて、もう辞世の句(詩)などというものは遺すまいと決意したのではないか。

そこには、写真を一枚も残さなかった理由と同じく、「自分は土中の死骨なのだから、そういうものを遺すべきではない」という強い思いがうかがえる。そして、その決意の通り、西郷は、詠める時間も力量もありながら、意識的に辞世の詩を遺さなかったのだろう。

西郷は、自分の死については何も言及しなかったが、漢王朝成立の英雄である韓信の死については、次のような詩を詠んでいる。

題下韓信出「胯下」一図上

韓信の胯下より出づる図に題す

盛名令終少

盛名終りを令くするは少なく

功遂竟淪亡

功遂げて竟に淪亡す

怪底胯間志

怪しむ底ぞ胯間の志

封王忽自忘

王に封ぜられて忽ち自ら忘るるや

盛んな名声を博しても、立派な最期を迎える例は少なく
手柄を立てても、結局は落ちぶれて滅びるものなのだ
不思議に思うのは、韓信はどうして若い頃の胯間の志を
楚の王位を与えられると、たちまち忘れてしまったのだろうか